

高崎みどり先生 ご退職にあたって

萩原 敏行

本学部で教鞭をとられた高崎みどり先生が、2021年3月末日をもってご退職されることになりました。これまでの先生のご活躍に対して、ひとことお礼の言葉を述べさせていただきます。

高崎先生は、お茶の水女子大学大学院修了後、東海大学の専任助手を経て1977年に文教大学文学部日本語日本文学科の前身である文教大学教育学部中等国語専攻、国語学担当の専任講師として本学に着任されました。その後、1987年の文教大学文学部日本語日本文学科の立ち上げにご尽力され、1995年に東京女子医科大学医学部教授として移籍されるまでの18年間、文教大学の多くの学生が、高崎先生の授業を通じて日本語の魅力についての薫陶を受けました。かく言う私も、また、近藤研至学長も、若かりし高崎先生に教えを受けた学生でした。高崎先生の明快な論理と歯に衣着せない物言い、学生指導の丁寧さはとても魅力的で、高崎ファンの女子学生たちにとっては憧れの女性だったようです。

その後、明治大学教授を経て、母校のお茶の水大学教授としてご研究、ご教鞭を重ねられた先生は、その後、お茶の水大学理事・副学長の任に就かれ、2017年に名誉教授になられています。

2017年、本学部国語専修の近藤研至教授が学長の職に就かれることになりました。それに伴い、近藤先生がお持ちになっていた日本語学関連の授業を担当する特任教授として、高崎先生を再び本学にお迎えするご縁に恵まれました。2018年からの3年間、短い時間ではありましたが、広く深い学識と経験に裏付けられた教育・指導にご尽力いただき、国語専修主任として感謝してもしきれません。

研究テーマに関して、専門は日本語学（近現代語）の文章・談話分析、文体論、日本語史、語彙論、言語生活研究などと多岐にわたります。詳細については業績一覧を参照していただければと思いますが、私個人としましては『学生のための言語表現法』『大学生のための「論文」執筆の手引き』などを教材として使わせていただいております。

また、高崎先生の日本語学の授業を通じて、学生たちは「身近な日本語を改めて捉え直すことの面白さを体験できた」「日本語に漠然と感じていた興味や違和感が、段々とはっきりしていく過程が面白い」といった感想をもつようになっていきます。教師を目指す学生たちが、自らが用いる言葉の魅力を学び、体験できたことは、同じ国語専修の教員として大変喜ばしい限りです。

国語専修に帰ってきてくださったからの3年の間、教室運営について、大学の動向の捉え方について、多くのご示唆をいただきました。学生たちだけでなく専修の教職員も、先生には大変お世話になりましたことに心から感謝いたします。特任教授というお立場のため、入試などの業務などに関われないなどの縛りが多く、かえって先生にお気遣いをさせてしまい、教室主任としては心苦しいこともありました。また、2020年の一年間はコロナウイルス拡大の状況のために、リモート授業や不自由な学生指導など、多大なご不便をおかけしました。退職にあたっての記念講演が延期せざるを得なかったことも大変残念です。状況が収束し次第、日を改めて決めさせていただきます。

高崎先生の今後の益々のご活躍と健勝を心からお祈りするとともに、本学部へのご教示、ご鞭撻を引き続きお願いしたいと思います。ありがとうございました。

(はぎわら としゆき 文教大学教育学部学校教育課程国語専修主任)